

# ナルド ベールに包まれた物語

林 眞理子、 事務局

ヨガと太極拳の教室でそれぞれ数人の方を指導しています。

特にヨガの教室では、気候やカリキュラムに合わせてアロマ（精油）を使います。皆さん楽しんで下さいます。教室が終わりアロマのことが話題になることがあります。自分では気付かないアロマの魅力に気付かされます。そうこうしていると、手元にはいろいろな精油が集まってきます。自然と調香にも興味が湧いてきます。

そんな折、「静岡市」をテーマにした（公社）日本アロマ環境協会が主催するイメージフレグランスコンテストに「こころの古里・太陽の恵み」という作品名で応募したところ、協会賞を頂き自分でも驚いてしまいました。

なんと偶然にも、その時の香りの審査委員長が国際香り文化の会の中村祥二会長でした。

中村会長より「コンセプトが分かり易く共感が持てる。太陽の恵み、海と山の多彩な暖かさのイメージが香りに出ていて、表情が豊かである。ナルドの香りを上手に活かしている」とご評価いただきました。そして、今のフレグランスではあまり使われない「ナルド」を使った理由を聞かれました。（応募作品には、「ナルデ（スパイクナード）」と書かれた精油を使いました。これ以後もナルドと表記します。）ナルドは、けっして良い香りとはいえませんが何か惹きつけられる精油でした。柔らかく暖かく湿った少し土臭いウッディノートにバレリアンと共通するニュアンスがある複雑な香りに、どことなく懐かしさを感じました。そのところが歴史ある静岡市にふさわしいように思われました。ナルドを少し使うことにより深みと奥行きができました。本当に素晴らしい精油でした。

また、ナルドの精油を購入した時に、その壮大な歴史を知って、この精油をさらに身近に感じる事ができました。一つ一つの精油に様々な物語がある

ことを思うと、香りの世界が広がっていくのを感じます。

そんなことを中村会長に少しお話したところVENUSに投稿するように勧められました。そうして調べていたことをまとめて原稿を提出したところ、厳しいダメ出しをいただきました。

聖書に登場する「ナルドの香油」の話は有名ですが、かえっていろいろな情報が錯綜しています。

一度はあきらめていたのですが、事務局の協力もあって日の目を見ることになりました。



Jatamansi

biolaya.com



Jatamansi root

snowlotus.org

「ナルドは、ヒマラヤ地方が原産のオミナエシ科多年草。草丈15～20cm、開花枝は40～50cmになり、小形の淡い水色～ピンクがかかった赤色の花が多数頂生する。太い根茎は葉鞘の繊維で覆われている。根及び根茎を乾燥したものは薬用、香料とする」とあります。

定かではありませんが古代エジプト、ギリシアやインド時代から使われていたようです。ナルドは、ローマ帝国の大プリニウス（23 頃～79）によって書かれた「博物誌」、旧約聖書のソロモン王の作とされる「雅歌」、そして、新約聖書の「福音書」に登場します。

しかし、歴史に登場する植物を挿図や名称から特定するのは、かなり難しい作業のようで、「ナルド」に関する情報はかなり混乱しています。

福音書に登場する「ナルド」は、インド経由の「ジャタマンシ Jatamansi」と言われています。この「ナルド」を「甘松香」としている記述が多くみられます。どちらもオミナエシ科ナルドスタキス属 (*Nardostachys*) で、生育地もヒマラヤ周辺で、バレリアンと近縁種で使用する根茎部には特異な香りがあるとされています。

市場で購入した甘松香などの生薬を分析した富山医科薬科大学和漢薬研究所の論文によると、「ナルドスタキス属は、インドヒマラヤから中国四川省にかけて2種が生育し *N. grandiflora* はインド、ネパール、チベット、四州、雲南に、*N. chinensis* は四川、青海、いずれも 3500～4500m の高地に生息している。青海南部、四川西部、雲南北部では、重なって生育している。

アーユルヴェーダ薬物『Jatamansi』、チベット薬物『sPang-spos』、スリランカ市場の『Jatamakuta』は *N. grandiflora* の根茎部、一方中国の漢薬『甘松香』およびウイグル薬物『Sumbul』は *N. chinensis* の根茎部（一部全草）である。

また、薬性は *N. grandiflora* と *N. chinensis* ではそれぞれ『寒（涼）』と『温』、逆である。結論として *Nardostachys* 属の生薬は、*N. grandiflora* を使うアーユルヴェーダ系医学と *N. chinensis* を使う中国医学ユナニー系医学との二群とに分けられる」としています。（ユナニー系医学とは、古代ギリシャ医学を起源とし、インド、中央アジア、北アフリカ諸国の伝統医学で世界三大伝統医学の一つに数えられる。）

現在、*N. grandiflora* は、ワシントン条約で、絶滅のおそれのある野生動植物の中の一つにあげられ

ています。精油は入手することができますが、ナルド原体は輸出が制限されています。

さて、イエスの生涯と言行を記したのが新約聖書の福音書です。

新約聖書の中の「ナルドの香油」は、「ヨハネによる福音書」の十二章、「マタイによる福音書」の二十六章、「マルコによる福音書」の十四章、「ルカによる福音書」の七章の四ヶ所に登場します。

しかし、「ナルドの香油」とはっきり書かれているのは「マルコ伝」と「ヨハネ伝」、「マタイ伝」と「ルカ伝」では、単に「香油」と書かれています。さらに、「ヨハネ伝」と「ルカ伝」では、マリアがイエスの「足」に香油を注いだとありますが、他の二つでは、イエスの「頭」に香油を注いだとされています。設定も少しずつ違ってきます。

ヨハネによる福音書には、「過越の祭の六日前、十字架の日が迫るイエスはエルサレムに行く前にベタニヤを訪れた。

ここでイエスのために晩餐会が開かれた。マルタは給仕をしている。イエスが死からよみがえらせたラザロも一緒に食卓に加わっている。

その時、マリヤは高価で純粋なナルドの香油一リトラ（約 300gr）を持ってきて、イエスの足に塗り、自分の髪の毛でそれを拭く。すると、ナルドの香りが家にいっぱいになった。（マルタとマリアとラザロは姉弟です。）

イエスの弟子のユダはこれを見て『なぜこの香油を三百デナリ（約 400 万円）で売って、貧しい人たちに、施さなかったのか』とマリアを厳しく責める。このユダ対して『この女のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それをとっておいたのだから。貧しい人たちはいつもあなたがたと共にいるが、わたしはいつも共にいるわけではない』とイエスは言われます」とあります。

このマリアがイエスにナルドの香油を注ぐ場面は、多くの宗教画の題材にもなっています。ピーテル・パウル・ルーベンス《シモン家のキリスト》、ピエール・シュブレイラス 《シモンの家の宴》、モレット・ダ・ブレシア《パリサイ人の家で夕食》などの作品があります。



《マリアとマルタの家のキリスト》

ヨハネス・フェルメール  
スコットランド国立美術館

このナルドの登場する場面ではないのですが、ルカの福音書の場面を描いたフェルメールの「マリアとマルタの家のキリスト」が思い浮かびます。フェルメール初期の作品で、マリアとマルタのイエスに対する気持ちの違いをみごとに表現した描写に心惹かれます。

丁度、「フェルメール展」が大阪市立美術館で開催（2月16日～5月12日）されています。この「マリアとマルタの家のキリスト」も展示されています。

フレグランスコンテストでの受賞を契機に精油の調合を楽しんでいましたが、なんと2015年には今度は「徳島」をイメージしたフレグランスコンテストで、環境大臣賞を頂きました。

今回は、「阿波藍ブルー」という作品名でフランキンセンス（乳香）を使用しました。ナルドといい、フランキンセンスといい聖書、イエスと何か不思議なご縁がありました。

また、太極拳の方では2005年に81歳で亡くなった楊名時先生が生前、(株)資生堂から「花椿」にちなんだ太極拳を作って欲しいとのご依頼を受けたご縁からできた「百花拳」の舞は、今では私たちの大切なものの一つとなっています。

交流会などで100人200人が集まった広い体育館に三重四重の輪になって演舞する時、思いがひとつになり宇宙と融和し、心が洗われるような気がいたします。

#### 参考文献

- 「調香師の手帖」中村祥二著 朝日出版社
- 「改訂版 新約聖書」中央出版社
- 「旧約聖書」東京創元社
- 「出エジプト記」岩波出版社
- 「聖書大辞典」新教出版社
- 「内村鑑三 聖書注解全集」教文館
- 「プリニウスの博物誌」雄山閣出版
- 「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館
- 「中医臨床のための中薬学」医歯薬出版
- 「ブリタニカ国際大百科事典」TBS・ブリタニカ
- 「チベット薬物の生薬学的研究（第13報）」  
山路誠一、小松かつ子、谿忠人、難波恒雄  
富山医科薬科大学和漢薬研究所
- 「<https://www.nep1.com.np/herbs/details?herb=Jatamansi-Spikenard/14/NE605>」